大鷲（おおわし）伝説

長編冒険小説　書下ろし

小嵐九八郎

NON POCHETTE

◆「ノン・ポシェット」創刊のことば

ノン・ポシェットは、ノン・ブック、ノン・ノベルの姉妹シリーズです。しかし、ポケットなり、ポシェットなりに楽に入る小さな判型、また既成のノン・ブック、ノン・ノベルから生み出されたという事情からいっても、むしろ両シリーズの子どもと申せましょう。

両シリーズの数ある本の中から、豊かな心、深い知恵、大きな楽しみに満ち、年月を経ても色褪せない「現代の古典」となるべきものばかりを厳選したつもりです。どうか親版のノン・ブック、ノン・ノベル両シリーズ同様、このノン・ポシェット・シリーズをご愛読いただき、進んでご意見、ご希望を編集部までお寄せくださるよう、お願いいたします。

昭和六〇年八月一日

NON・POCHETTE編集部

●ノン・ポシェット—NPN183

大鷲伝説　長編冒険小説

平成2年7月20日　初版第1刷発行

著者　小嵐九八郎

発行者　伊賀弘三良

発行所　祥伝社
東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル　〒101
☎ 03 (265) 2081 (営業)
☎ 03 (265) 2080 (編集)

印刷所　堀内印刷

製本所　豊文社

万一，落丁・乱丁がありました場合は，お取りかえします。　Printed in Japan.

ISBN4-396-32183-X C0193
©1990, Kuhachirō Koarashi

書下ろし

長編冒険小説

大鷲(おおわし)伝説

小嵐九八郎

祥伝社 ノン・ポシェット

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertor

序章 ―― 7
一章 白山山系の雪原 ―― 17
二章 野性の少女 ―― 62
三章 大いなる飛翔 ―― 104

四章　陥穽（かんせい）　159
五章　白山の乱れ　204
六章　大鷲（おおわし）と少女の挽歌（ばんか）　262
終章　《さよなら――白山》　315
解説　山前譲（やまぜんゆずる）　324

序章

未練がないといえば、嘘になる。

——麻衣子に。

東京は、青山あたり。

十二月十日。

表参道の欅の葉がほとんど落ちた。幹と梢が黒く目立ちはじめ、青い空を割っている。

坂倫彦は、からっ風に舞っては落ちる落ち葉を踏む。

〝スタジオ・サティーン〟の湿りを忘れた鉄筋コンクリートの階段を登る。

今日は、三枚目のアルバムのレコーディングに向け五回目の音合わせだ。倫彦自身は、ドラムを受け持っている。芸大で打楽器の基礎をきっちり学んだがゆえに、メトロノームより正確でタ

イトなリズムをキープできていると、自分では思っている。
ドアのノブを押す。
学生のバイトらしい管理人が、電話にしがみついて喋りまくっている。倫彦に軽い会釈をよこす。
〝ON〟のランプが消えているスタジオの分厚い二重のドアを開ける。
中では、すでにベーシスト兼バンド・リーダーの筒井と、ヴォーカルの佐野山が待っているだろう、少し、苛立ちながら……。
が、部屋には誰もいなかった。
昨夜持ち込んだベース・ドラムやスネア・ドラムやタム・タムが淋しげだ。
防音が効いたがらんとした部屋が、倫彦の耳底を、妙に圧迫する。
「……坂さんですよね。電話ですけど」
管理人が、十分遅れで到着した倫彦を呼びもどす。
「あ、坂？」
筒井の声が、電話のあちらで睡たそうだ。
「うん。どうした？」
「えーと、今日は中止なんだ」
「えっ？」

「連絡が、遅れたけどよ……坂のドラムじゃ、みんなやってけねえってな。で、新しいのを探した。今度のは、前ノリで音が軽いやつなんだ」
「ええっ？」
「坂よ、おまえは芸大出だけあって技術は申しぶんがねえんだけど、なんてえのかな。一途さとか、パワーがねえんだ」
「……」
「〝汝自身を知れ〟って、キエルケゴールかサルトルか言ってただろ？」
「知ら……ん」
「二十六にもなってよ。というより、おまえは食うに困らないんで、音がダルなんだ。ファンキーってところがまるでねえ。親父さんとおふくろさんが花屋を二十軒も持ってんじゃ、しゃアねえけどな」
　電話のせいか、筒井は言いたいことを言う。ついこの間まで、コンサートの最中に目と目を合わせニヤリと笑い合って、互いのデキのよさを確かめ合ったのに。
「筒井。そうじゃ、ないんだけど」
　倫彦は、理由も分からず目の前から消えてしまった淡野木麻衣子によるショックを語ろうとしたが、口を噤む。麻衣子への失恋が、性格のあっさりさに加え、音を悪くしているのか。
「てなわけでよ、おまえさんは自由にやってくれ。プロダクションのほうもそう言ってるし……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

そうだ、最後に……坂は、フリーのドラマーに向くかもしれねえな。じゃアよ、永遠の少年くん」

皮肉っぽそうな声を上げ、筒井は電話を切った。

倫彦は、十八インチのトップ・シンバルを指で弾いた。シンバルは、仏壇の鉦のように、無意味に冴えた音を上げた。

ごく緩い表参道の坂道を降りる。

植込みに埋め込まれている細かい鉄格子の枠から、地下鉄の轟音が漏れてくる。うるさい。雀も、その音に飛び立っていく。

また、緩い坂を、原宿の駅へと登る。

少女のようにうら若い女が、多い。

あ、麻衣子！

倫彦は、胸を抉られる思いに駆られ、すれ違った女を追い駆けた。

――違っていた。

似ていたが、麻衣子の唇はタイトなハイアットのそれのように、引き締まっている。

いけない。

麻衣子を早く忘れないと……駄目になる。

でも、なぜ、麻衣子は突然に消えたのだろう。

代々木八幡のマンションに、帰った。

麻衣子は、七月の梅雨明けに消えたが、匂いが残っているようで、部屋を取り払うことができないでいる。

宅急便でなく、郵便小包が届いていた。

差出人を見た。

淡野木未来子……。

不意に、麻衣子の温もりが蘇ってくる気がした。麻衣子の家族にちがいない。名前からいって……妹か。〝みきこ〟とでも読むのか。

同時に、もう再び麻衣子に会えない予感が小包から漂ってきて、鳥肌が細かく騒ぎ立つ。

住所は、石川県石川郡白滝村白滝谷奥。

白滝谷がどこにあるか知らないが、六ヵ月の麻衣子との同棲で、麻衣子の故郷だと当てがつく。

鋏を探すのももどかしく、指で封を切った。

絹のように滑らかな手触りだが、木綿のように強そうな藍色の布に巻かれ、一本の録音テープが出てきた。

手紙が、便箋で二枚、添えられている。

『お姉さんは、十一月二十九日に、白滝ダムから死体で見つかりました。事故死と警察は言ってます。でも、わたしは、自殺だと思います。二十四歳と五カ月でした』

倫彦は胸底が、抜け落ちてしまう感覚に襲われる。

『お姉さんは、クラリネットを毎日、どこか秘密の場所で、一人、練習していて、テープに吹き込んでいました。このテープは、そのうちの最後のほうのテープです』

手紙の字は、まるまっこい少女の使う文字で、たどたどしい。

『見知らぬお兄さんに、お姉さんは音楽を教えてもらったそうですね。だから、死ぬ間際には、どれだけ上達したか、聞いてあげてください』

未来子という妹の手紙には、幼いせいか、何かが欠落している気がする。

『では、お元気で。さようなら』

そうだ……。

この手紙には――哀しみがない、哀しみが。

そうではない。

哀しみなど、哀しすぎて蒸発してしまったのだろう。

倫彦は、泣いた。

神宮(じんぐう)の森と新宿の盛り場を往復する、黒々と翼が濡れているカラスが、マンションのあちこち

に滲んで見える。
なぜ、麻衣子は死んだのだろうか。
事故死でなくて、自殺……。
そもそも、なぜ、倫彦を捨てたのだろう。
テープのカセットに『'88・11・20・麻衣子』と、麻衣子自身の楷書の、流れるような筆跡のラベルが貼りつけてある。
テープをセットし、再生ボタンを押した。
音が流れ出てくるまでの数秒を、固唾を飲んで待つ。
完全な沈黙が、流れる。
すぐに、風の音だろうか、かすかな、吐息のような音が聞こえる。麻衣子の呼吸づかいのようで、倫彦の胸が、切なく鳴る。耳を研ぐようにすると、吐息の音には、老人の肺の音鳴りのようなものも混じっていることに気がつく。
老人の肺の音ばかりでなく、時折り、ギャーッと木と木が互いを切り刻むような音も入る。
クラリネットの音が出る。
〝ホワイト・クリスマス〟だ。
四カ月前より数段、音色が透明に聞こえる。
麻衣子の唇の感触が、不意に、蘇る。クラリネットを吹奏する歌口のリードの部分を、自ら

の唇のように、倫彦は思ってしまう。あの、ぬめぬめした暗闇のような、麻衣子の唇を。
澄んだソプラノのクラリネットの音の高まりに、唐突に、鳥の声が混じる。
〝チッ　チッ　チッ　チッ……〟
小鳥は、麻衣子に語りかけているのだろうか、互いに、呼び合っているのだろうか。
やがて、クラリネットと小鳥の声が相互に呼応し合うようになった。
〝ペペチー　ホイチー　ペペチー　ホイチー……〟
小鳥の鳴きが、長くなる。
小鳥の鳴き声は、一羽から、数百羽とも思われる複数の賑やかさになってくる。
麻衣子の〝ホワイト・クリスマス〟が終わりに近づいても、小鳥の鳴き声は熄まない。
〝ホイチー　チュクチー　ピーチー　ツイチー　ペペチー……〟
むしろ、かしましいくらいに、小鳥どもは囀る。
麻衣子のクラリネットが音色を曳きずって、終わろうとする。
と――。
「グオ　グオ　グオ……」
いままで聞いたことのない、不気味なほどの低音が、テープに入ってくる。鼻にかかる濁った音で、温もりもあるようだ。
小鳥の囀りが、一瞬、止まった。

が、喧騒より激しい鳴きに、小鳥の声は転化した。
〝チッ　チュッ　チッ　チュッ……〟
小鳥の声が、遠くへ消えた。
「グオ　グオ　グオ」という異様な音は、「グオ　グオ　グオ」と別の音と重なった。
どこで録音したか、森の厚さが分かるようだ。小鳥の声が、いつまでも、細く、か細く聞こえ、やがて、テープが止まった。
――麻衣子の生の声を、わずかに期待していたが、ついに聞けなかった。

麻衣子への思いが、再び、燃え上がった。
どうしようもないのに、燃え上がった。
思えば、二人の楽しく短い期間を〝記録する〟など、思いもつかなかった。写真一枚さえも残っていない。むろん、あの、アルトの凜とした声を残すことも……。
麻衣子の故郷へ行こうか。
行こう。
麻衣子の匂いを嗅ぎたい。
花を活け、線香でも焚こう。好きな泉屋のクッキーを、供えよう。
そして、自分と別れた理由を考えよう。死んだ理由を考えよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor